Ⅱ．道央ブロック－倶知安町の紹介編

ジャガイモ畑と羊蹄山

プロフィール

倶知安町（くっちゃんちょう）は、北海道後志支庁管内、虻田郡にある町。後志支庁の所在地で、後志支庁南西部の中心都市の役割を果たしています。

＜倶知安町の人口＞
15,419人
(H21年6月末現在)

＜倶知安町の面積＞
261.24km2

歴史

①開墾の始まったクッチャン原野（明治25年）

第一次移住者、真鍋浜三郎他五名がクッチャン原野に入墾しました。翌26年に倶知安村が設置され虻田村戸長役場の管轄となりました。

（はじめて倶知安という漢字が使われる）

クッチャン原野

②レルヒ中佐と蝦夷富士登山隊員（明治45年）

スキーの指導者として名の知れた第七師団レルヒ中佐一行はスキーによる羊蹄山登山を行いました。
レルヒの羊蹄登山は小樽新聞･奥谷記者の同行もあり連日、新聞報道がなされました。
その後も論評や紀行文が随時連載され、スキーを社会に広めたという多大な功績を残しました。

③倶知安でのスキー草創期 雪中の移動の手段として取り入れられる（大正2年～）

スキーは雪中での移動の手段として、軍やひいては郵便配達に取り入れられ、次第に「生活やスポーツの道具」として広まっていきました。

倶知安の地元では手製スキー、下駄スキーが町に見られるようになり、スキー製造業者もあらわれ始めます。

大正初期の倶知安駅構内

④後志スキーの中心地となる

大正13年には「倶知安スキークラブ」が発足し、倶知安「酒場の山」で第1回山麓スキー大会が開かれました。

大正15年には余市スキークラブが加わり、名称も「後志スキー大会」となり、倶知安は後志スキーの中心地となりました。

⑤倶知安町の農業「じゃがいも(男爵)」は日本一の生産量を誇る

倶知安の農業といえばじゃがいも「馬鈴薯」。特に男爵と呼ばれる品種は日本一の生産量を誇り、十勝メークイーンと共に全国に知られています。

馬鈴薯は町の特産品として位置付けされ「じゃが太くん」のキャラクターで親しまれ、8月上旬には「くっちゃんじゃが祭り」のイベントも開催され毎年たくさんの来場者でにぎわいます。
スキーを滑る「じゃが太くん」は町のシンボルになっています。

倶知安の自慢 ●極上のパウダースノー ●日本一の生産量の「じゃがいも」

南半球が夏になる頃、ニセコマウンテンリゾート(グラン・ヒラフ)にはパウダースノーを滑るためにオーストラリアから観光客が押し寄せるようになりました。

2006年には東京・名古屋・大阪の三大都市圏の住宅地をさしおいて住宅地地価上昇率日本一に躍り出ました。

馬鈴薯は明治25年から栽培されて以来、今では収穫量は約4万トンを誇り、販売額で約30億円に達し、農業での生産額は50%以上を占めています。

そんな倶知安の「困った」ところ

- 郊外型店舗の増加により駅前商店街に空き店舗が増えた
- ヒラフ開発にあたり景観条例施行以前の建物が乱立している
- 観光客増加が地元経済にプラスなのか疑問(海外企業の進出による開発)
- 高齢者世帯の増加
- 交通の便の悪さ
- 賃貸住宅の家賃が高い(札幌並)
- 産科医の減少